

【4-8 定性的システマティックレビュー】

CQ	新CQ	転移・再発トリプルネガティブ乳癌に対してプラチナ製剤は勧められるか？
P	転移・再発トリプルネガティブ乳癌	
I	プラチナ製剤を含む化学療法	
C	プラチナ製剤を含まない化学療法	
臨床的文脈		転移・再発トリプルネガティブ乳癌に対する化学療法

O1	OS
非直接性のまとめ	システマティックレビューで抽出された4試験のうち、3試験はすべてmTNBCの1stラインを対象としている。Tutt(2018)はBRCA変異陽性かつER陽性例を含んでいるがごく少数であり、対象の非直接性はすべて0とした。対照群に投与されたレジメンの一部において標準治療とは言えないレジメン(e.g. DTX+Cape)が含まれるものの、深刻な非直接性はないと判断した。
バイアスリスクのまとめ	4試験すべてオープンラベル。Hu(2015)とTutt(2018)はクロスオーバーあり。全体のバイアスリスクとしては-1とした。
非一貫性その他のまとめ	Tutt(2018)のみdifference in meanを用いたoutcome評価であり、メタアナリシスに含めていない。Yardley(2018)はイベント数が不明である。そのため、結果に深刻なばらつきがあるとは言えないが、非一貫性は-1とした。
コメント	介入群、対照群いずれのレジメンも我が国の転移・再発乳癌に対して一般的に行われているものではないが、プラチナ製剤を含むことでアウトカムが悪化するということはない。

O2	PFS
非直接性のまとめ	同上
バイアスリスクのまとめ	同上
非一貫性その他のまとめ	同上
コメント	同上

O3	ORR
非直接性のまとめ	同上
バイアスリスクのまとめ	4試験すべてオープンラベル。Hu(2015)とTutt(2018)はクロスオーバーがあるが、ORRには影響しない。
非一貫性その他のまとめ	ORRに関してはTutt(2018)もメタアナリシスに含めている。この研究のみORRに差は認めておらず非一貫性は-1とした。ただし、他の3試験は併用療法同士の比較であるのに対し、Tutt(2018)はプラチナ単剤とタキサン単剤の比較である。
コメント	同上